

摘 録

○長尾巧、筑豊夾炭層と古期岩層との境界の性質

筑豊石炭鑛業會月報第二十一卷第二百五十五號、

大正十四年九月

此問題に二の異なる見解がある。其の一は夾炭層沈積前に南北向の斷層又は地裂を生じ、其溝狀地域に夾炭層が沈積したと言ひ其二は夾炭層沈積後に南北向の斷層又は撓曲を生じたと言ふので前者は鈴木敏博士之を説き後者は矢部長克博士之を唱へたるものである。筑豊炭田炭層の構造には一種特異の癖があつて地層は多くは北々西より南々東に走り西方にては東に緩斜し東にては突然逆轉して西方に急斜する。従つて向斜軸は東縁に近い。更に走向にやゝ斜なる多くの平行な斷層があり概して西落である。なほ本炭田の特殊なる癖は一の向斜で東西の境界線の性質が異つてゐる。即ち東西に古期岩層があるさ東では常に斷層であるが西では不整合である。著者は此構造は鈴木博士の見解の如くして、もし山間の凹所に沈澱した第三紀層が後に西方より來襲した横壓力を受けたものとするもよいが寧ろ夾炭層沈積後に起つた地質變動の爲め平準であつた地層が北々西―南々東に走る多くの略ぼ平行した地塊に分れ各區域の東部が西部に比し相對的に多く落下したTiltingをして其後の浸蝕で西部に古期岩層が露出するに到

つたと考ふる方が説明が簡單であるさ結んでゐる。(鈴木博士の説を非なりとするにはもつと力學的に解くの要はないであらうか。單に説明が簡單なりとの理由で不充充分なる議論をする事が許されるさ思はれない)。(横山)

○長尾巧、佐世保炭田と唐津炭田との關係

筑豊石炭鑛業組合月報第二十二卷第二百六十號大正十五年二月、

唐津佐世保兩炭田の關係はすでに大藥學士の述べた如くで佐世保夾炭層は整合的に介化石を含める綠色砂岩上に位し後者は更に整合的に唐津炭層の上位にあるを知る。故に西北九州炭田中最上位は佐世保夾炭層と認める。綠色の介化石ある砂岩は即ち著者が以前芦屋層群と命じたものにあたり。上中部始新又は上部始新なるべく佐世保夾炭層は上部始新又は下部漸新ならんと思はれる。佐世保炭層の下部よりBrachyotus Japonicus Matsumoto なる偶蹄類が出た事を徳永博士が報じたので下部漸新であるさいふ確證を得た。著者はなほ此炭層の關係を詳細に記述してゐる。(哺乳類が時代判定に過大視されがちである)。(横山)

新 著 紹 介

○北海道火山湖研究概報

田中簡秀三著 北海道廳發行 四六倍版一五五頁 大正十四年十一月印刷

本報告は北海道本島の重なる火山湖に就いて湖沼學の調査を記述したものである。著者は大正五年以來調査に従ひ、大正